

今回紹介する偉人たち

YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

030



①野満 長太郎



②洲上 貞記



③井上 太郎七



④大津 末次郎



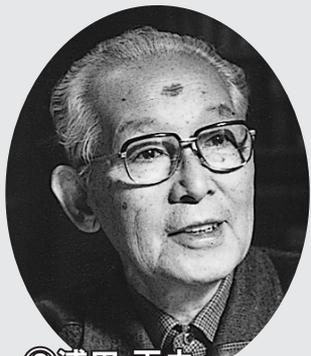
⑤本田 喜久八



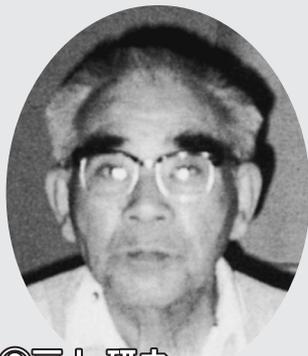
⑥河口 愛子



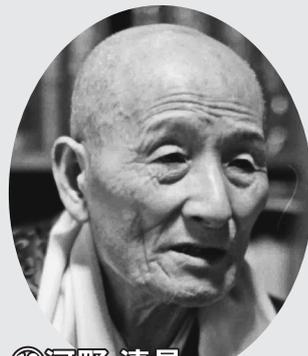
⑦野満 隆治



⑧浦田 正夫



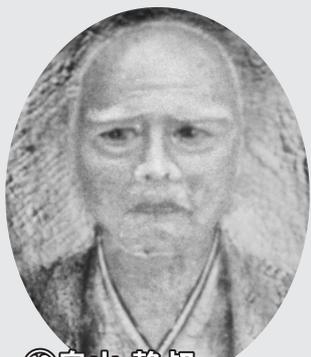
⑨戸上 研之



⑩河野 清晃



⑪飛松 與次郎



⑫奥山 静叔



⑬徳丸 作蔵



⑭栗原 武三太



⑮酒井 龍輔



⑯片瀬 淡



⑰保田 蕾



⑱野口 サキ



⑲大坂 巳年子



⑳大久保 真次郎

①日本初の民政を敷く

(一八五二〜一九一〇)

野満 長太郎



野満長太郎は幕末の嘉永四年（一八五二）、現在の山鹿市古閑字白石の野満源次郎の長男として誕生しました。成年に達した長太郎は明治三年（一八七〇）、十九歳の若さで戸長（現在の市町村長）に就任しました。

その後、宮崎八郎（一八五二〜一八七七）（※1）や平川惟一（一八五〇〜一八七七）（※2）らが造った植木学校（※3）で自由民権運動（※4）に触れたことがきっかけとなり政府によって選ばれた（官選）の戸長を辞任してしまいました。当時、戸長の多くは江戸時代の役人である惣庄屋（※5）などからそのまま選ばれていました。そのため学校や役場の運営費用などに関する不正の噂もあり、江戸時代よりも負担が増えたと感じて

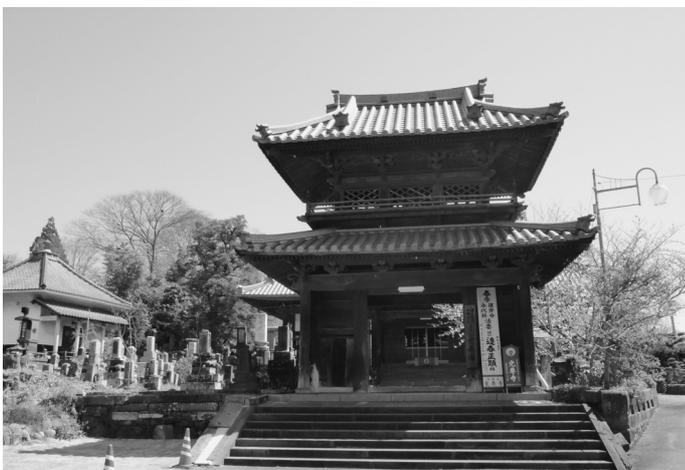
いる人たちが多かったと言われています。そうした中、植木学校で学んだ人たちが中心となり熊本県北地域では官選の戸長を廃止し、戸長を選挙で選ぶべきだとする「戸長征伐」と呼ばれる運動が起きます。この運動が起こると長太郎は従弟の野満安親、富記兄弟とともにこの運動のリーダーとなります。三人は常に行動を共にしていたため「三人野満」と呼ばれました。こうした中、明治十年（一八七七）一月二十九日には山鹿の光専寺で「一万人集会」と呼ばれる大規模な反対集会が開かれ戸長征伐運動はピークに達しました。

そうした中、同年二月、鹿児島で西郷隆盛（一八二八〜一八七七）が挙兵し西南戦争が勃発したのです。

西郷が戦いを始めたとの一報が伝わると長太郎は宮崎八郎、平川唯一らと熊本協同隊（約四〇〇名）を結成し、西郷らの薩軍と行動を共にすることを選びました。二月二十二日、長太郎ら熊本協同隊は薩軍と共に政府軍が立て籠もっていた熊本城の総攻撃に参加しました。

しかし、熊本城の守りは堅く、その日のうちに長太郎の従弟、安親、富記兄弟が戦死してしまいました。

熊本城が簡単に落とせないと分かっていた薩軍は熊本城を包囲したまま、主力は北上すること



「一万人集会」が行われた光専寺



三人野満顕彰の碑
(山鹿市墓地公園)

を選び、二月二十五日には山鹿に進軍します。そこから三月二十一日に薩軍が撤退するまで、山鹿の地には日本で最初の選挙で選ばれた代表による政治（民政）が行なわれました。「民政官」に長太郎が任じられ、選挙を行なって住民の代表である人民総代（大森惣作ほか数名）が選出されました。

国会で普通選挙法が成立し、一定年齢に達した人が政治に参加できるようになったのはこのできごとから四十八年も後の大正十四年（一九二五）でしたので、このことはとても意義のあることでした。

その後も西南戦争の戦いが続く中で熊本協同隊の隊長だった平川惟一が戦死してしまったため長太郎が代わって熊本協同隊の隊長となり、薩軍とともに九州各地を転戦しました。

そして長太郎は戦いに勝てないことが分かると、八月十七日、宮崎県長井村（現在の延岡市）で政府軍に降伏しました。降伏した長太郎は懲役五年の判決を受けて、東京の市ヶ谷監獄（刑務所）に収監されました。収監中は漢学の知識を認められ、他の受刑者たちに読み書きを教える役目を引き受けていました。二年収監された後に釈放され、残りの人生は山鹿に戻って穏やかに過ごしました。実子が無かったため、甥の隆治（※6）を養子に迎えました。死後は妻のチヨとともに野満家累代墓に眠っています。

※1 宮崎八郎：現在の荒尾市出身の自由民権運動家。フランスの思想家・ルソーの『社会契約論』に影響を受けて、人民（国民）主権の考え方を広めました。中国の革命家・孫文らを援助した宮崎滔天は八郎の弟です。

※2 平川惟一：熊本城下で細川家家臣の子として生まれました。藩校時習館で学びましたが、後に宮崎八郎らの影響で自由民権運動に関心を持って、植木学校の設立に尽力し、その校長を務めました。

※3 植木学校：現在の熊本市立植木小学校（熊本市北区植木町）の場所に明治八年（一八七六）、宮崎八郎、平川惟一ら自由民権運動家らが設立した県立の旧制中学校。熊本城下や北地域の士族の子が学びました。多い時には八十名ほどが在籍しましたが、やがて軍事訓練等を行うようになってきたため県からの補助が打ち切られ半年ほどで閉校となりました。

※4 自由民権運動：明治政府に対して憲法の制定や選挙によって選ばれた代表による議会の開設を迫るなどした政治・社会運動。

※5 熊本藩主・細川家が都と村の間に設けた手永と呼ばれる行政組織の責任者。

※6 野満（旧姓・坂本）隆治：長太郎の妻チヨの弟・坂本隆義の長男。京都帝国大学（現在の京都大学）物理学科を卒業し、地球物理学者として活躍しました（十一頁参照）。

【参考文献】

- ・ 広報やまが一九八六「野満長太郎」ふるさと人物誌
- ・ 山鹿市史編纂室編一九八五『山鹿市史 下巻』山鹿市
- ・ 山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

②初代三玉村長。

養蚕奨励者

(一八三八〜一九二四)

ふちがみ 貞記
さだき



山鹿郡靈仙村（現在の山鹿市久原）の農家の子として生まれた淵上兼助は明治三年（一八七〇）に名前を改め、貞記と名乗りました。貞記は当時の惣庄屋の遠山弥二兵衛（一八二三〜一九〇七）（「蒲生堤」として知られる湯の口溜池の築造に尽力）の目に留まり、わずか十六歳で蒲生村の帳書（庄屋の補佐役）に採用されました。その後、久原村、靈仙村の帳書等を歴任した後、文久四年（一八六四）下吉田村の庄屋となりました。明治に入ると戸長の職を歴任し、明治二十二年（一八八九）に町村制が施行されて三玉村ができると貞記はその村長となりました。その後、明治四十三年（一九一〇）に辞職するまでの二十一年間、村長を務めました。

その間、湯の口溜池の維持管理、宮之谷溜池（通称「一ツ目さんの堤」）の拡張に力を尽くして農業用水の確保に努めました。

貞記は産業の振興に力を入れ、明治二十年（一八八七）県下に先駆けて農事品評会を創設し、米・麦・粟・繭の四種について品評し、優良者の表彰を行いました。また三玉地域が養蚕に適していることを見抜くと、早くから養蚕を奨励しました。その結果、明治初年には一軒も無かった養蚕農家が明治三十八年（一九〇五）には四六〇戸となりました。



宮之谷溜池（通称「一ツ目さんの堤」）

また、学校教育にも力を入れ、明治十九年（一八八六）の久原尋常小学校を皮切りに上吉田、三玉東部（福原区）、三玉の各尋常小学校を新築しました。加えて明治二十六年（一八九三）赤痢が大流行すると、伝染病の隔離病棟を建設して患者を収容するとともに、衛生思想の普及に尽力しました。これらの功績から明治四十一年（一九〇八）藍綬褒章を受章しました。お墓は山鹿市鹿本町来民の光運寺に立てられています。

【参考文献】

- ・ 広報やまが一九八六「淵上貞記」ふるさと人物誌
- ・ 森川恒臣一九六八「村政五十八年 流風余韻は今も：淵上貞記翁―功績調書から」『石人』第九巻第十号 熊本史談会
- ・ 山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

③ 初代 大道村長。城北学館設立
だいどう

(一八五〇〜一九二八)

井上 太郎七
いのうえ たろうしち



井上太郎七は現在の山鹿市方保田字日置の郷士(武士の身分)だが城下町ではなく農村等で生活している人。井上為三郎とトヨの間にも生まれました。父親の為三郎は自宅で私塾を開いており、近郊の子どもを集めて読み書き等を教えていました。幼少期から父の塾で学んだ太郎七は十四歳になると分田八幡宮の神官・杉谷齋の塾に入って漢学を勉強しました。その間、慶応二年(一八六六)には第二次長州征伐に伴って発生した小倉戦争(※)に従軍しています。杉谷塾に通う傍ら、千田村(現在の山鹿市鹿央町)の姫井競の塾で算術を習い、熊本の武芸師範・星野九門実則(一八四四〜一九一六)の道場で伯耆流居合および四天流組討(柔術)の鍛錬に励みました。

杉谷塾での勉学を終えると明治八年(一八七五)鹿本郡巡查(警察官)となり(一八七七)、明治十二年(一八七九)には

大道村戸長、明治十七年(一八八四)熊本県会議員(現在の県議会議員)に当選するとともに来民町戸長を拝命、明治二十二年(一八八九)町村制施行に伴い大道村長となりました。

村長在任中は農業改良や用水事業に力を注ぐとともに明治二十三年(一八九〇)、野中亀雄(一八六一〜一九三五)とともに城北学館(現在の鹿本商工高等学校の前身)創設に携わり、人材を輩出する基盤を作りました。城北学館は僅か五年で廃止されましたが、その間に鉄道大臣や参議院議長を務めた松野鶴平(一八三三〜一九六二)、医学博士の片瀬淡(本冊子二十頁で紹介)、歌人の宗不早(一八八四〜一九四二)らが学んでいます。

そのほか、明治三十二年(一八九九)山鹿に東肥銀行(一九〇五年解散)

を設立し、頭取となったほか鹿本郡産馬組合副組長などを務め、鹿本農学校や大道小学校の設立にも尽力しました。



城北学館の碑
(鹿本商工高校)

※小倉戦争：徳川幕府と長州藩との間で起こった第二次長州征伐の中で関門海峡を挟んで行われた戦い。肥後藩細川家も幕府側として出兵し、小倉周辺で長州藩と激しい戦いを繰り広げました。

【参考文献】

- ・ 広報やまが一九八七「井上太郎七」ふるさと人物誌
- ・ 山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

④農機具「マルコ犁」を開発

(一八五八〜一九二二)

おおつ 大津
すえじろう 末次郎



大津末次郎は安政五年（一八五八）一月、山鹿中町の金物商・大津市次郎の次男として生まれました。大津家は屋号（一家の特徴などをもとにして家に付ける称号）を「麴屋」と言つて金物類の販売をはじめ農機具の修理や製造を行つていました。

現在は田畑を耕すのにトラクターなどの機械を使いますが、一昔前まではその作業を牛や馬に「犁」という農機具を引かせて行つていました。末次郎は小学校しか出ていませんでしたが、近くの農民たちの生活を見て、その苦勞を知つていたので、少しでも安定して使いやしく、より深く耕せる犁を作りたいと考えるようになりました。やがて寝食を忘れて犁の改良に没頭し、短床犁という犁を開発しました。

末次郎は従来の肥後犁を改良したこの犁を「マルコ犁」と名づけて明治三十五年（一九〇二）に特許を取得、全国的にも評価を受け、九州地方に留まらず三重県や新潟県でも販売され人気を博しました。

その後、末次郎は「マルコ犁」を大日本農会という農業の振興団体による「第二回改良牛馬耕犁懸賞」という顕彰に応募し、三等賞に選ばれています。この時は一、二等に該当が無かつたため三等賞が最高の賞でした。

末次郎は犁のほか除草機、種まき機なども発明しました。また、末次郎は骨董品が好きだったので商用を兼ねて大阪へ行つた際などに骨董品を仕入れて春と秋の年2回、骨董品や自分が考案した農具の展示販売会を開くなどして行っていました。



「マルコ犁」（山鹿市立博物館蔵）

【参考文献】

- ・森川恒臣一九六八「農業の生産手段マルコ犁を開発した大津末次郎・その業績をさぐる」『石人』第九巻第六号 熊本史談会
- ・熊本日日新聞社編集局編一九七七『農魂』熊本の農具 熊本日日新聞情報文化センター
- ・広報やまが一九八六「大津末次郎」ふるさと人物誌
- ・山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市
- ・香月洋一郎二〇一一『馬耕教師の旅』法政大学出版局

⑤実業家。 肥後米の改良に尽力

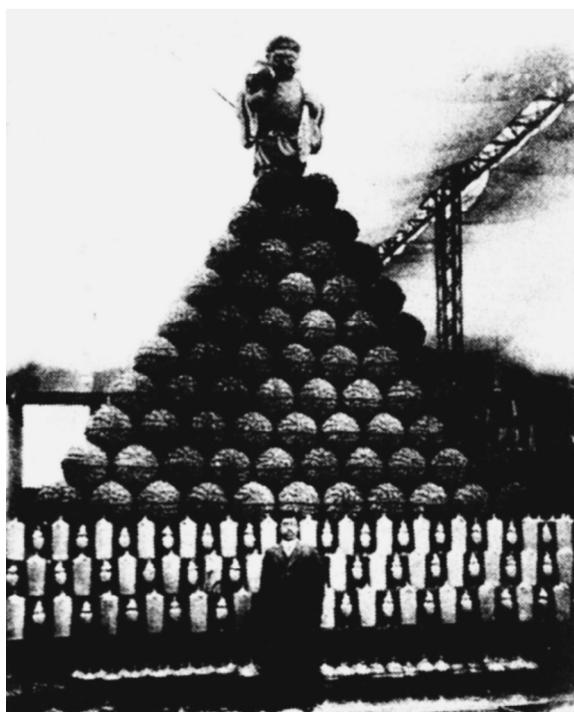
(一八五九〜一九四三)

ほんだ
本田 喜久八
きくはち



本田喜久八はお米を取り扱う問屋だった本田金平、うたの長男として山鹿下町で生まれました。江戸時代には「米相場の基準」とされ、非常に質が良いとされた熊本県のお米でしたが、喜久八が大人になった頃にはその品質がすっかり低下していました。その原因は幕末から明治維新の混乱で、農家の若者が兵隊に行かされたり、西南戦争の戦場となったことや当時の気候も関係しているようです。

そこで喜久八は父から仕事を継ぐと、お米の品質を上げて少しでも収入を増やそうと努力を始めます。まず現在の山鹿市上吉田で先進的な農業に力を入れていた農家の池田宇一郎いけだに協力を依頼し、先進地であった岡山県から優れた種類のお米を取り



ブリュッセル万国博覧会に出品した米俵
(人物は米加田寅彦)

寄せて、品種改良を行いました。また明治二十九年(一八九六)に山鹿米穀株式会社を設立し、俵装ひょうそう(米俵)の改善にも力を入れるなどの結果、明治三十六年(一九〇三)には肥後米輸出検査で特別優等の表彰を受けました。その後も熊本県物産共進会(博覧会)などで優等賞を受賞し、明治四十三年(一九一〇)ベルギーで開かれたブリュッセル万国博覧会で日本は米俵を出品しましたが、その俵に用いられたのは喜久八が用意した米でした(俵装を行なったのは現在の山鹿市鹿央町出身の米加田寅彦ひこ)。

喜久八が山鹿米穀株式会社を設立した頃は日清戦争の勝利などで好景気になっており、同じ年の九月、喜久八は「本田酒造場」の名前で酒造会社を開設、肥後米を使った酒造りにも取り組みました。酒造の面では清酒および赤酒の生産で評判となり、関西方面や当時は日本の植民地だった朝鮮まで販売を拡大しました。清酒はその後、数々の品評会で優秀賞を受賞しました。大正十三年(一九二四)には産業功労者として県知事から表彰

を受けています。昭和十九年（一九四四）には個人の事業から会社組織に改めて、さらに酒造りに力を入れました。この会社は喜久八の死後、昭和三十五年（一九六〇）に「千代の園酒造」と名前を変えて現在まで続いています。

その間、喜久八は明治四十年（一九〇七）山鹿実業会（現在の山鹿商工会議所の前身）という実業家の集まりを組織して、産業の振興に努めました。また明治四十二年（一九〇九）には山鹿製糸会社を立ち上げて養蚕、製糸事業にも力を入れました。大正十四年（一九二五）には自身が誘致に力を入れた鹿本鉄道会社（山鹿く植木を結んでいた鉄道）の社長に就任しました。活動は実業界に留まらず、明治二十五年（一八九三）山鹿町会議員に当選すると、昭和二年（一九二七）まで三十六年という長きにわたって議員を務めました。

【参考文献】

- ・境 信三郎「一九五六「本田喜久八伝」
『肥後商工先達伝』熊本商業高等学校
- ・森川 恒臣「一九六九「天馬空を行く達人 本田喜久八―肥後商工先達伝より―」『石人』第十巻第十号 熊本史談会
- ・山鹿市史編纂室編「一九八五『山鹿市史』下巻 山鹿市
- ・広報やまが「一九八五「本田喜久八」ふるさと人物誌
- ・山鹿市編「二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

⑥東京に高等女学校を設立、婦人活動家としても活躍
(一八七三〜一九五九)

かわぐち
河口 愛子



河口（旧姓・原）愛子は山鹿で温泉旅館・平野屋を営んでいた原久太郎と母ヨリの間にもうまれました。勉強が大好きだった愛子は高等小学校（※1）を卒業すると当時の山鹿には無かった女学校にどうしても入学したいと言って、両親を強く説得し、熊本市の済々黌附属女子学校（現在の尚綱高等学校）に入學します。明治二十四年（一八九二）に卒業した後、中富村（現在の山鹿市鹿本町）の下分田尋常小学校（※2）で助教員（先生の見習い）を務めました。当時の鹿本郡内であった一人の女性の先生だったため非常に珍しがられたそうです。

尋常小学校に就職して一年経った明治二十五年（一八九二）、愛子は玉名郡竈門村（現在の和水町）の河口禎太と結婚しました。愛子は二十歳、禎太は二十四歳でした。

結婚から五年ほどした明治二十九年（一八九六）夫の禎太が知人からの依頼で朝鮮の漢城（現在の大韓民国のソウル市）で発行されていた漢城新報という新聞の主筆（主要な記事を担当

する記者）になったため夫婦で朝鮮へと渡りました。

愛子は夫を支え、自らも小学校の教員として生活を支えました。明治三十一年

（一八九八）夫の禎太が漢城新報の主筆を辞めて帰国し、恩師の依頼で秋田県の旧制中学校（※3）の教員となったので、愛子も夫とともに秋田、さらに明治三十五年（一九〇二）には夫の転任で京都へと付いていきました。

ところが、明治三十六年（一九〇三）愛子が二十九歳の時、もともと体がそれほど丈夫でなかった夫の禎太が三十四歳という若さで病死してしまいました。家族を京都へ呼び寄せていたので、愛子は夫に代わって自分の三人の子どもと姑（夫の母親）、四人の義理の弟、妹、そして朝鮮から連れ帰った少年一人の生活を支えなければならなくなりました。朝鮮人の少年は愛子たちが朝鮮で暮らしていた頃、親を亡くして孤児となっていたのを可哀想に思っけて引き取ったのです。

周囲は家族を連れて熊本へ帰ることを勧めますが、愛子はそれを聞き入れず、京都で家族ら九人の面倒を見ることを選びました。そこで愛子は、昼は手芸学校の先生、夜になると夜間学校の先生として働き、深夜と休日は「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（正式な教員となるための資格試験）」の試験勉強に力を注ぎました。努力の末、試験に合格した愛子は、しばらくは京都市立堀川高等女学校（現在の堀川高等学校）の教員を勤めましたが、姑が亡くなったことがきっかけとなり、



夫と長女・政子とともに
(明治27年/1894撮影)
『私の人生（伝記・河口愛子）』より

子どもたちの教育のために大正二年（一九一三）、京都を離れて、東京へと移ります。東京でも子育てと合わせてしばらくは高等女学校の教員として働いた愛子でしたが、大正五年（一九一六）家事裁縫研究所と家庭助手養成所を設立しました。「家庭助手」とはいわゆる「家政婦」のことで愛子が作ったこの養成所の卒業生が日本最初の家政婦になったと愛子は述べています。

大正八年（一九一九）家事裁縫研究所は日本女子実務学校と名を改めて文部省から各種学校の認可を受けました。続いて愛子は高等女学校の設立を考えますが、大正十二年（一九二三）関東大震災が発生し、東京が大きな被害を受けたため、計画は止まってしまいます。しかし愛子は諦めることなく必要な資金を集める方法を考えました。それは同じ熊本県出身で総理大臣も務めた清浦奎吾や愛子の計画に賛同する軍人の東郷平八郎（一八四八〜一九三四）、実業家の渋沢栄一（一八四〇〜一九三一）、画家の富岡鉄斎（一八三七〜一九二四）などの当時の有名人たちに頼んで文字や絵を書いてもらうことです。そしてその書や絵画を売って得たお金で東京市小石川区（現在の東京都文京区）に小石川高等女学校（現在の東京都西東京市の文華女子中学校・高等学校）を設立したのです。こうしたお願いはその後も続け、東京に住んでいる有名人だけではなく大阪や神戸、時には中国、台湾などにも足を運びました。旅先では教え子の家に泊めてもらうなどして旅費を少しでも節約して、貯めたお金で校舎や設備を充実させていきました。

この間、愛子は「婦人市政研究会」という団体を作って男女平等の実現について世の中に訴えていきました。また愛子が特に力を入れたことに「廃物利用（リサイクル）運動」があります。これも夫の死後、わずかな収入で自分の子どもや大勢の家族の生活を支えなければならなかったことがそのきっかけとなっています。

愛子はどこへ行くにも信玄袋（布でできた平底の手さげ袋）

を持っており、汽車に乗ると袋の中から布の切れ端を取り出して上手くつなぎ合わせ、座布団や肘つきなどを作っていました。また普通は捨ててしまうようなナスのヘタやジャガイモの皮を料理に生かす方法などを提案しました。このことは『趣味の廃物利用』（小石川高等女学校出版部一九二六年）という本にまとめています。

愛子は昭和六年（一九三一）河口家の家や土地を竈門区に寄付しました。このことは村の人たちにとっても感謝され、和水町竈門の公民館前に「河口家記念碑」が建てられました。また昭和三十三年（一九五八）には「文華会館」の建築費用も寄付しています（現在も竈門区の公民館として利用されています）。こうしたことから昭和三十四年（一九五九）愛子が亡くなると遺骨は竈門の河口家の墓に納骨されるとともに盛大な区民葬が営まれました。

- ※1 高等小学校：現在の小学校五、六年生と中学校一、二年生にあたる十歳〜十四歳までの子供たちが勉強する学校で尋常小学校とは違って義務教育ではありませんでした。
- ※2 尋常小学校：現在の小学校一年生から四年生にあたる子供たちが通う学校で義務教育でした。
- ※3 旧制中学校：現在の中学校一年生から高等学校の二年生にあたる十二歳〜十六歳の男子が学ぶ学校でした。女子は高等女学校等へ進学しました。

【参考文献】

- ・ 広報やまが一九八三・一九八四「河口愛子」ふるさと人物誌
- ・ 河口愛子一九九二『私の人生（伝記・河口愛子）』大空社
- ・ 山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市



河口家記念碑
(和水町竈門)

⑦地球物理学の権威

(一八八四～一九四六)

野満
隆治



野満隆治は松尾神社の宮司・坂本隆義の長男として菊池郡城北村（現在の山鹿市菊鹿町）で生まれ、明治三十六年（一九〇三）母方の伯父・野満長太郎の養子となって野満という名字に変わりました。旧制鹿本中学校（現在の鹿本高等学校の前身）を卒業後、広島高等師範学校（現在の広島大学）へ進学し、卒業後は京都で旧制中学校の教員を勤めました。

しかし、間もなく退職すると京都帝国大学（現在の京都大学）理工科物理学科に入学し、明治四十三年（一九一〇）の卒業と同時に海軍教授となり海軍兵学校（広島県江田島）の教官を務めました。大正九年（一九二〇）には理学博士の称号を受け、学位を得た後は京都帝国大学の地球物理学教室の教授となりました。当時の博士号は非常に権威のあるもので、隆治に博士号が与えられることが決まったと分かると村中の人たちが野満家の本家に集まって祝賀会が開かれたほどでした。

昭和三年（一九二八）、兵庫県明石市で日本の時間を決めてい

る標準時子午線（東経一三五度の経線）の標識を正確な位置に建てたいとの要望が出されると、隆治を中心とした京都帝国大学の研究者らに依頼がありました。

隆治ほか4名の研究者たちは約一ヶ月の天体観測を行って正確な地点を求め、標識が立てられました。

その後、昭和十二年（一九三七）京都帝国大学理学部長、昭和十五年（一九四〇）には優れた研究をしている科学者が集まった学術研究会議（現在の日本学術会議の前身）地球物理学の副部長に任命されました。

昭和二十年（一九四五）、隆治は教授を辞めて山鹿に戻ってきました。しかし翌年、自宅を新築するための木材伐採作業を監督中に倒れてきた木が頭に当たって亡くなりました。この事故は村人たちが隆治の帰郷を喜んで木材の伐採作業を行なっていたことをただ見ていることができず、現場に出向いたことで起きてしまったことだと言われています。

【参考文献】

- ・ 広報やまが一九八六「野満隆治」ふるさと人物誌
- ・ 山鹿市史編纂室編一九八五「山鹿の文化」『山鹿市史 下巻』山鹿市
- ・ 岩井賢太一九九六「野満隆治」『菊鹿町史』本編 菊鹿町
- ・ 山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

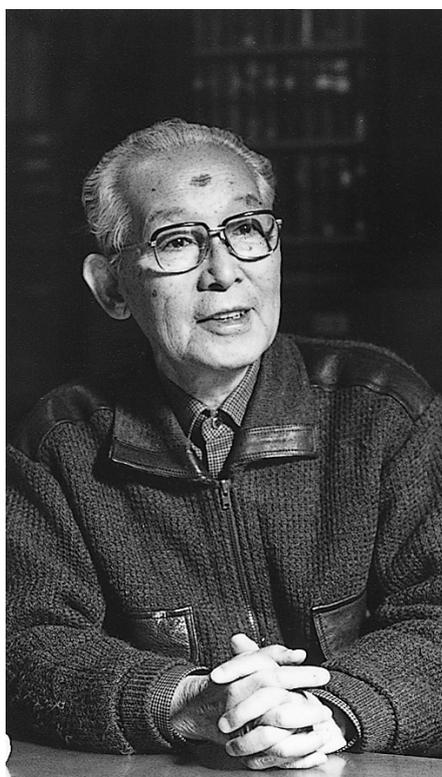


隆治の博士号授与を聴きつけて集まった人々

⑧ 日本画家。日展事務局長も務める

(一九一〇～一九九七)

浦田 正夫



浦田正夫は山鹿市山鹿松坂町で生まれました。家は熊本市出身の日本画家・堅山南風(一八八七～一九八〇)の師匠、高橋廣湖(一八七五～一九二二)を叔父に持つなど日本画を得意とする家系でした。五歳の時、両親とともに上京し、昭和三年(一九二八)十八歳の時、旧制巢鴨中学校(現在の巢鴨高等学校)を卒業すると日本画家・松岡映丘(一八八一～一九三八)が開いていた本郷絵画研究所に入門。翌年、東京美術学校(現在の東京芸術大学)日本画科に入学しました。東京美術学校に在学中の昭和八年(一九三三)第十四回帝国美術院展覧会(帝展、現在の日展の前身)で「展望風景」と題した絵画が初入選し、注目を集めました。

昭和九年(一九三四)に同校をトップの成績で卒業すると昭和十一年(一九三六)同じ松岡映丘の所で絵を勉強していた山本丘人(一九〇〇～一九八六)や杉山寧(一九〇九～一九九三)

らと「瑠爽画社」という団体を結成し、日本画の革新を目指しました。また、昭和十六年(一九四二)には高山辰雄(一九一二～二〇〇七)、野島青茲(一九一五～一九七二)らと「采社」という日本画の研究団体を設立し、昭和三十六年(一九六一)に解散するまで戦争直後も含め展覧会の開催を続けました。

そうした中、昭和二十年(一九四五)四月、自宅が空襲に遭ったため茨城県土浦市に疎開(一時的に避難すること)、その年の七月、玉名市出身で画家だった美川竜子と結婚しました。正夫は戦後も茨城県に留まって絵画の製作に取り組み、茨城県における現代美術の発展に尽くしました。そのため現在も多くの作品が茨城県立美術館に収蔵されています。

昭和二十八年(一九五三)東京に転居、昭和五十三年(一九七八)には日本美術展覧会(日展)の出品作品だった「松」という絵が日本芸術院賞を受賞しました。日本芸術院賞を受賞するということはその分野における最高の栄誉とされています。

正夫は学生時代から剣道が得意で高齢になってからも剣道の稽古を欠かすことがありませんでした。日本芸術院賞の受賞インタビューでは「剣道も絵画も自己練習(自分を磨く)の方法としては変わりなく、剣道のおかげで受賞できた」と述べています。

昭和五十四年(一九七九)から日展の理事、平成元年(一九八九)からは事務局長を務め、出品作品の審査等に関わりました。昭和五十八年(一九八三)熊本県近代文化功労者表彰を受け、平成五年(一九九三)勲三等瑞宝章を受章しました。

【参考文献】

・原口長之「一九八三「浦田正夫先生」

『昭和五十八年度顕彰 熊本県近代文化功労者』熊本県教育

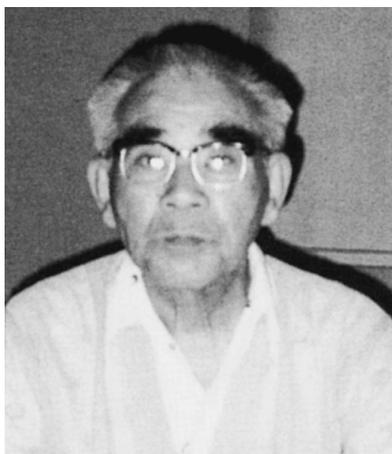
委員会

・山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

⑨ベルリンオリンピックに出場(走り幅跳び)

(一九二二〜一九八六)

とがみ
戸上 研之



戸上研之は現在の山鹿市石出身で旧制鹿本中学校卒業後、関西大学に進学、大学在学中の昭和十一年(一九三六)ベルリンオリンピックに出場しました。得意種目は三段跳びでしたが、同大会では走り幅跳びで日本代表

に選ばれました。オリンピックでは残念ながら予選落ちでしたが翌年の昭和十二年(一九三七)には三段跳びで十五メートル八十六センチというオリンピックの金メダリストに匹敵するような記録を樹立しました。昭和十五年(一九四〇)に開催が予定されていた東京オリンピックでも活躍が期待されましたが、昭和十三年(一九三八)に足を骨折し、競技生活を引退しました。また戦争のため東京オリンピックも中止となっています。

競技引退後は、日本陸上競技連盟(陸連)、日本学生陸上競技連合(学連)の強化コーチ、大阪体育大学講師などを務め後輩の指導に尽力しました。

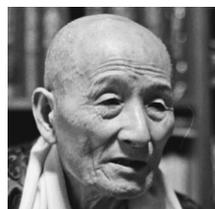
【参考文献】

・山鹿市編二〇〇四『新補 山鹿市史』山鹿市

⑩僧侶、仏教美術研究者

(一九〇七〜二〇〇一)

こうの
河野 清晃



河野清晃は医師であった河野義晃の長男として現在の山鹿市鹿北町四丁で生まれ、大正六年(一九一七)僅か十一歳で和歌山県の高野山総持院に入り僧侶の道を進みました。高野山大学を卒業後は大学院に残って仏教美術(仏塔)の研究を続け、特に「高野山根本大塔の研究」は仏塔の宗教的意義を追求したものとして著名な論文となりました。同論文はその頃、仏塔の研究に来ていたベルリン大学教授トラウツ博士の目にとまり、ドイツ語でも出版されました。

昭和十五年(一九四〇)には奈良市に古くからある有名な寺院のひとつ、大安寺の住職となり、その当時、荒れ果てていたお寺の復興に力を尽くしました。建物の整備はもちろんです。が、「光仁会(奈良時代の光仁天皇の供養)」などの伝統行事を復活させました。光仁会では「不老長寿の薬」とされる笹酒(青竹の筒に日本酒を入れて温めたもの)のふるまいなどがあり、奈良の伝統行事の一つとして、現在ではよく知られています。

また、清晃はドイツ語で論文が紹介されたことがきっかけとなって、その後も永く日本とドイツの親善に力を尽くしたことで、昭和三十六年(一九六一)ドイツ大統領から「一等功労十字章」という勲章を授けられました。

【参考文献】

・鹿北町誌編纂委員会編一九七四『鹿北町誌 幸の国のあゆみ』鹿北町

⑪ 社会主義新聞「平民評論」の創刊を企画

(一八九九〜一九五三)

飛松 與次郎



鹿本郡広見村（現在の山鹿市鹿北町）で飛松常三郎・八ツの三男として生まれた與次郎は広見尋常高等小学校を卒業後、明治三十六年（一九〇三）十七歳の時から来民尋常小学校（現在の山鹿市鹿本町の来民小学校）の准指導心得（免許は持っていないが、教員として働くことを認められた教員、代用教員のこと）として勤めました。

鹿本郡米野岳村（現在の山鹿市鹿央町）合里小学校に転任した後の明治四十年（一九〇七）、社会主義者（資本主義に反対して、より平等な社会を築こうとする考え方を持った人）の松尾卯一太（一八七九〜一九一三）、新美卯一郎（一八七九〜一九一三）らが「熊本評論」という新聞を創刊すると與次郎は第一号から熱心に読んでいました。当時、社会主義の考え方は政府から認められていなかったため、翌年、「熊本評論」は発行禁止になってしまいました。そこで、松尾と新美は「平民評論」と名前を変えて新聞の発行を続けることを計画します。「熊本評論」の購読を通じて松尾と知り合いになっていた與次郎は明治四十二年（一九〇九）教員を辞めて、「平民評論」の発行責任者となりました。しかし発行寸前で新聞は押収され、與次郎は禁固八ヶ月の判決を受けて熊本監獄（刑務所）に収監されてしまいました。その翌年の明治四十三年（一九一〇）東京で社会主義者の幸

徳秋水（一八七二〜一九一三）らが明治天皇暗殺を計画したとして逮捕されると熊本からも松尾、新美、飛松、佐々木道元（一八八九〜一九一六）が計画に加わったと疑われ東京へ送られました。これがいわゆる大逆事件（幸徳事件）と呼ばれる事件です。当時、天皇およびその近親に対して危害を加えた者（加えようとした者や計画した者も含む）は「大逆罪」と言う通常の殺人罪より重い罪とされ、有罪の場合は必ず死刑とされていました。明治四十四年（一九一三）弁護人も無い秘密裁判の結果、犯人とされた二十四名が死刑判決（二名が有期刑）を受けることとなりましたが、翌日、天皇の特赦（特別に罪を許すこと）により飛松ら十二名は無期懲役に減刑されました。飛松は秋田監獄などで十五年間服役した後、大正十四年（一九二五）仮出獄が認められて故郷に帰りました。

帰郷後は広見村役場の臨時書記や川辺村役場に勤めるなどしました。戦後は山鹿町で傘張りなどの仕事をする傍ら得意の墨書を生かして知人から頼まれた揮毫（文字を書くこと）をしていたと言われています。

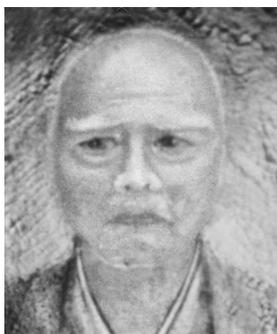
大逆事件（幸徳事件）については昭和三十年代から関係資料の調査が進み、再審（裁判のやり直し）請求が行われたり、犯人とされた人たちの名誉の回復が進んでいます。平成二十六年（二〇一四）山鹿市の本澄寺に「大逆事件犠牲者顕彰碑」が建てられました。

【参考文献】

- ・高浜守雄一九七五「飛松与次郎のこと」
- ・『日本談義』昭和五十年四月号 日本談義社
- ・山下信哉一九七九「大逆事件―松尾卯一太とその周辺」
- ・『石人』第二十巻 第九号 熊本史談会
- ・鹿央町史編纂室編一九八九『鹿央町史』上巻 鹿央町

⑫ 蘭医学者。北里柴三郎らを育成。大村益次郎にも影響。
(一八二七〜一八九四)

奥山 静叔
おくやま せいしゅく



奥山静叔は、本名を礼郷と言つて山鹿郡相良村（現在の山鹿市菊鹿町）の医者（漢方医）・奥山亨（号・黙斎）の次男として生まれました。文政十一年（一八二八）シーボルト事件（※）に関わつた、丹

後（現在の京都府北部）出身の医者・中島元長が長崎から相良へと逃げてきました。中島を匿つた黙斎は中島を通じて蘭医学（西洋医学）を知ります。蘭医学が漢方より優れていることを知つた黙斎はこの時、息子の静叔に蘭医学を学ぶことを勧めました。

十九歳の時に父・黙斎が亡くなり、その跡を継いだ静叔は蘭医学を学ぶことを決意し、丹後の中島の元へと向かつたのです。しかし、既に中島が亡くなつていたので、静叔は大坂の緒方洪庵（一八一〇〜一八六三）が開いていた適塾へ入門しました。この頃、貧しかった静叔は「あんま」や身につけたオランダ語の翻訳などで学費を賄いました。数年後、その才能を認められた静叔は適塾の塾頭に抜擢されました。

その頃、静叔の活躍ぶりを聞いた紀州藩が高い給料で迎えたという話もあったそうですが、故郷のために働きたいと考えていた静叔はそれを断り、弘化三年（一八四六）三十歳で熊本に戻ってきました。

帰郷後、細川家で典医（藩主に仕える医者）として召し抱えられ、武士の身分を与えられるとともに藩から長崎の屋敷を与えられて医業を開業しました。この時、静叔の退塾後に適塾で

学んでいた大村益次郎（一八二四〜一八六九）（後に兵学者となり明治維新後に陸軍の創設に携わつた）が訪れています。嘉永二年（一八四九）、静叔は熊本城下の内坪井に移つてあらためて医業を開業し、その傍らでオランダ語を教えました。

明治四年（一八七二）二月、静叔が五十五歳の時には、熊本の古城に設けられていた「治療所（後の医学所兼病院、現在の熊本大学医学部の前身）」でオランダ人のマンスフェルト（一八三二〜一九一三）らとともにオランダ語や物理学などを教えました。静叔の堂々たる体つき、豊かな声量の明るい声での講義は若い学生たちを魅了したと言われています。静叔が四年間で育成した人材の中には細菌学・免疫学者の北里柴三郎（一八五三〜一九三二）や帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）学長を務めた緒方正規（一八五三〜一九一九）、産婦人科医として日本婦人科学会創立に尽くした浜田玄達（一八五五〜一九一五）など、後の日本の医学界を担つた人物たちがいました。静叔は明治七年（一八七四）に引退し、明治二十七年（一八九四）七十八歳で亡くなりました。墓は熊本市西区池田の往生院にあります。

※シーボルト事件：オランダ商館で医師をしていたドイツ人のシーボルトが海外への持ち出し禁止だった日本地図を持ち出そうとしていたことが密告により幕府に発覚した事件。シーボルトは日本を追放となり地図を送つた幕府役人・高橋景保ら関係した多くの日本人も処罰されました。

【参考文献】

- ・柴田堅誠一九八〇「先覚者・奥山静叔について」『石人』第二十一巻 第十一号
- ・大墨通夫一九九六「奥山静叔」『菊鹿町史』本編 菊鹿町

⑬ 外交官生活十六年、常に日中親善に努めた

(一八六〇〜一九一三)

徳丸 作藏



徳丸作藏は万延元年（一八六〇）二月一日に山鹿郡長村（現在の山鹿市菊鹿町長谷川）の農家・徳丸庄三郎、トネの長男として生まれました。作藏は、幼い頃から鳩野茂庵の元で学び、

次いで山鹿手永の惣庄屋を務めたこともある福田春蔵の肥猪義塾（現在の玉名郡南関町）で学びました。その後、作藏は上京すると、興亜会（※1）に入ったことで中国に関心を抱くようになりました。

作藏が初めて中国大陸に渡ったのは、隣村の月足力子（十八歳）と結婚した直後の明治十六年（一八八三）十二月五日で、作藏が二十四歳の時でした。これは後に総理大臣を務めた原敬（一八五六〜一九二二）が天津領事として赴任する際に頼み込んで随行したことで実現したものです。

作藏は天津に着くと本格的に中国語を勉強し、帰国後、明治二十七年（一八九四）に発生した日清戦争（※2）の際には大本営（日本軍の最高機関）に登録した二四二人の通訳官の一人に選ばれて陸軍付の通訳官として従軍しました。この時の功績が認められた作藏は明治三十年（一八九七）外務省に採用され、通訳生となり北京公使館に赴任、やがて二等通訳官となりました。

作藏が外務省で有名になったのは明治三十一年（一八九八）

に発生した「戊戌の政変」と呼ばれる清（中国）でのクーデターに関わるものです。この政変は清で日本の明治維新のような大規模な改革を図ろうとした清の政治家・康有為、梁啓超、譚嗣同らが保守的な権力者の西太后の怒りを買って失脚させられた事件です。作藏は西太后に追われた梁啓超を保護し、天津から東京へ亡命（他国へ逃れる）する手助けをしています。この功績によって作藏は勲六等単光旭日賞という勲章を受章しました。明治三十三年（一九〇〇）、「扶清滅洋（清を援助して西洋を滅ぼす）」のスローガンをかけた義和団という秘密結社が北京の外国公使館区域を包囲した、いわゆる義和団事件（北清事変）が発生しました。清では西太后らが義和団を支持する立場を取ったため、諸外国の外交官たちは非常に怯えました。この時、作藏は西徳二郎公使とともに北京に籠城して、諸外国の外交官たちを励まし、得意の語学力を生かして、その安全を図りました。作藏の働きは日本だけでなく諸外国からも高く評価され、ロシアやフランスから勲章を送られました。そして明治三十四年（一九〇一）、中国内陸部にある重慶の副領事となり、明治三十八年（一九〇五）には領事に昇格、さらに明治四十年（一九〇七）、汕頭（中国広東省）の領事に転任し、外交官として職務を果たしました。

義和団事件の時、作藏は北京在住の日本人から一体の観音像を預かりました。この像は事件の混乱で破壊されることを恐れた北京のお寺の僧侶がその日本人に渡したものでした。像を渡された日本人は作藏が熱心な仏教徒であることを知っていて、公使館に持ち込んだのでした。受け取った作藏は毎日、この観音像に手を合わせていたと伝えられています。

明治四十五年（一九一〇）、心臓病を患った作藏は外務省を退職しましたが、日本には帰らず、妻の力子とともに朝鮮（現在の韓国）南部の鎮海という町に移り住みました。その際、鎮海要港部司令官という現地の日本海軍の司令官を務めていた上泉

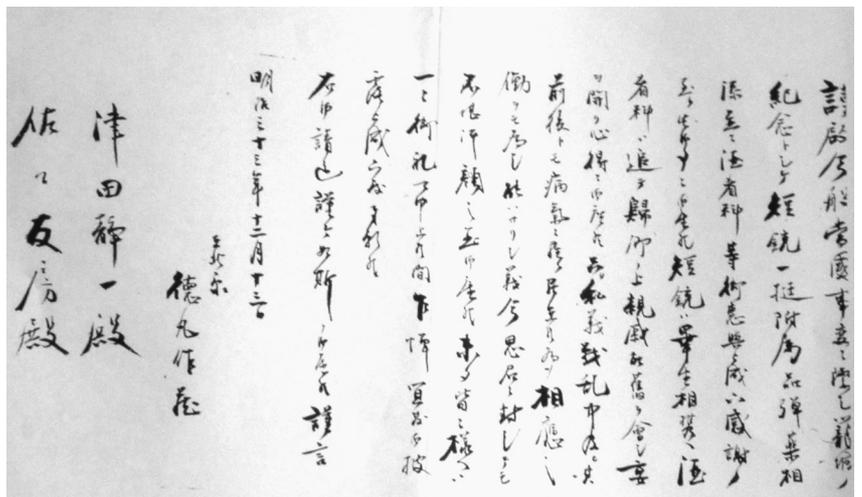
徳弥（一八六五〜一九四六）の協力を得て、観音像を安置するための寺院を建立しようと運動を始めました。しかし作藏はその完成を見ることなく大正二年（一九一三）十二月十日に五十四歳で亡くなりました。寺院の建設運動は妻の力子が引き継ぎ大正十一年（一九二二）に完成して、鎮海山徳丸寺（現在は韓国天理教鎮海教会）と名付けられました。作藏のお墓は故郷の菊鹿町に建てられています。



徳丸作藏墓
(山鹿市菊鹿町長谷川共同墓地)

※1 興亜会：明治十三年（一八八〇）日本で最初にできたアジアの振興を目的とした組織で、中国語学校の運営も行なっていました。

※2 日清戦争：明治二十七年（一八九四）に発生した日本と清（中国）との間で起こった戦争。戦いに勝利した日本は莫大な賠償金や台湾などの領土を手に入れました。



徳丸作藏の書簡（明治33年／1900）（津田静一・佐々友房あて）

熊本県出身の津田静一（実業家）と佐々友房（教育家）にあてた手紙。義和団事件の際の作藏の活躍を聞いた両人は作藏に短銃、弾薬と現金を送りました。この手紙は贈り物に対する作藏からの礼状。

（原本は国立国会図書館憲政資料室蔵）

（執筆者・竹下輝幸 山鹿市文化財保護委員長）

【参考文献・ご協力いただいた方】

加藤雅彦さん、徳丸邦男さん

・黒龍会編一九三六「徳丸作藏」

『東亜先覚志士記伝』下巻 黒龍会出版部

・中根環堂一九四〇「徳丸作藏氏と鎮海観音」『観音の霊験』有光社

・徳丸達也一九九六「徳丸作藏」『菊鹿町史』本編 菊鹿町

⑭ 言論人。徳富蘇峰らと「国民新聞社」を設立

(一八六〇〜一九一一)

栗原 武三太



栗原武三太は、山鹿郡矢谷村（現在の山鹿市菊鹿町）の淵上淳平の四男として生まれました。父の淳平は矢谷村の庄屋を務め御郡代直触という武士の身分を持った有力者でした。武三太は山鹿手永（郡と町村の間に設けられた行政組織）の惣庄屋だった福田春蔵や書家の土肥樵石（一八四一〜一九一五）らから学問や書を学びました。

長兄の耕作は教員などを務め、次兄の幾、三兄の令三は西南戦争の際、熊本協同隊に参加し戦死しています。武三太も兄たちとともに砲術を習っていましたが、西南戦争には参加しませんでした。

武三太は熊本に自由民権運動を掲げる政治結社「相愛社」が

明治十一年（一八七八）結成されると、思想家でジャーナリストの徳富蘇峰（一八六三〜一九五七）らと参加し、熊本県内各地を遊説するとともに、機関紙『東肥新報』の刊行にあたりました。

明治十三年（一八八〇）、栗原清九郎の養子となって、名字を栗原に改めています。

その後、一時期、長野県庁に勤務したこともありましたが、明治二十三年（一八九〇）、徳富蘇峰らが東京で「国民新聞」（現在の東京新聞の前身）を創刊すると武三太もこれに参加し、国民新聞社の理事営業総務を勤めました。記事を執筆することはありませんでしたが、社内で、もめ事が起こった時などは必ず武三太の人柄で解決したと言われています。表舞台に出ることはありませんでしたが「縁の下の力持ち」として国民新聞社を支え続けました。

そうした中、明治四十四年（一九一一）朝鮮からの帰途、岡山県で列車から転落して死亡してしまいました。武三太の事故死を聞いた徳富蘇峰は大変残念がったと伝えられています。

【参考文献】

・徳丸達也一九九六「栗原武三太」『菊鹿町史』本編 菊鹿町

⑮作家。代表作に「油麻藤の花」
(一八九九〜一九八五)

酒井 龍輔
さかい りゅうすけ



酒井龍輔は、鹿本郡内田村中原（現在の山鹿市菊鹿町）の農家・酒井嘉一・美寿の長男として生まれました。明治四十四年（一九一一）内田尋常小学校を卒業すると、父と一緒に五年間、農業に従事していましたが、勉強が好きだった龍輔は次第に勉強を続けたいという思いが強くなり、大正七年（一九一八）、十九歳で熊本の英語学校に入学しました。その年、長崎市の鎮西学院の編入試験を受け入学を果たしますが、翌年、熊本市の県立中学済々黌（現在の熊本県立済々黌高等学校）へ転入しました。卒業後は東京の明治大学商学部に進学しましたが、大正十一年（一九二二）、病気のために退学して帰郷しました。その後、大正十二年（一九二三）一年志願兵（装備に関わる

費用を自己負担する代わりに一年だけ現役兵士として働く制度）として陸軍第五六連隊（久留米市）に入隊しました。その頃に作家の有島武郎（一八七八〜一九二三）の随筆に感動し、文学で生活していこうと決心したと言われています。除隊後、再度上京し、昭和二年（一九二七）國學院大學付属高等師範部に入學し、「青垣」、「歌と評論」の同人（同じ趣味を持った仲間）となり、それらの雑誌に小説を投稿するようになりました。なお、この年、同郷の横田艶と結婚しています。

卒業後は熊本に戻って代用教員として働きましたが、昭和七年（一九三二）に妻と娘を残して上京。小説「鏡面の鮎」を『小説文学』に発表、さらに昭和九年（一九三四）の小説「油麻藤の花」が雑誌『改造』の懸賞小説に入選し、小説家として広く知られるようになりました。

以後は同郷の平川虎臣（一九〇三〜一九六九）らと親交を深めながら、『星座』、『日本記録』などの同人雑誌を中心に精力的に作品を発表しました。昭和十三年（一九三八）には改造社が企画し、北原白秋（一八八五〜一九四二）や与謝野晶子（一八七八〜一九四二）らが選者を務めた「新万葉集」（一般から公募し、約七千名の短歌二万七千首を収録）に短歌六首が掲載されました。

昭和十五年（一九四〇）に帰郷し、以後は教員として内田中学校や稲郷中学校等に勤務しました。その間、昭和二十年（一九四五）『寒菊の記』を出版。その後も文学に対する気持ちを抑えることなく原稿を書き続けました。

【参考文献】

- ・岩井賢太一九九六『酒井龍輔』『菊鹿町史』本編 菊鹿町
- ・龍虎の会編一九九九『油麻藤の花―酒井龍輔小説集―』

さろん・ど・漱雲

⑩ 医学者。カルシウムを研究。

(一八八四～一九四八)

片瀬 淡



片瀬淡は明治十七年（一八八四）、山鹿郡来民町（現在の山鹿市鹿本町）で外科医の片瀬豊記とスモの長男として生まれ、父の豊記は優秀な医者として県北地域で知られていました。淡が十歳の時に亡くなりました。淡は旧制鹿本中学校（現在の熊本県立鹿本高等学校）を卒業後、兄弟のいなかった淡は母親のスモとともに大阪へ転居し、大阪府立高等医学校（現在の大阪大学医学部の前身）に入学、医学を勉強しました。

明治四十二年（一九〇九）に卒業すると、そのまま大阪府立高等医学校の研究室に残り病理学（病気の原因などを探る医学の一分野）を専攻（専門的に研究）しました。特にカルシウムが人体に及ぼす効果についての研究に力を入れ、栄養病理学や母体環境医学の研究も行いました。

大正九年（一九二〇）には大阪府立医科大学の教授となり翌年、研究の成果が認められて医学博士の学位を授与されました。その後、ドイツに三度留学し、病理学の分野で非常に権威があった「ウイルヒョウ賞」を受賞するとともに昭和六年（一九三二）大阪府立医科大学の後身である大阪帝国大学（現在の大阪大学）教授となり、病理学講座を担当しました。この頃、ノーベル賞の候補になったとも言われています。

しかし輝かしい功績も太平洋戦争がはじまると環境が一変してしまいます。妻のヨシミを亡くし、二人の娘婿は戦死、長男は出征（軍隊に加わって戦地に行くこと）という中で昭和二十年（一九四五）空襲によって、それまでの研究資料の多くが焼失してしまいました。それでも、淡は逆境にひるむことなく、研究の成果を『カルシウムの医学』という五〇〇頁を超える本にまとめ、その本は淡が亡くなった昭和二十三年（一九四八）一月から五ヶ月を経た六月に刊行されました。

また大正十一年（一九二二）に発売された江崎商店（現在の江崎グリコ株式会社）の「グリコキャラメル」の箱には「医科大学教授 片瀬博士推奨」と印刷されていました。グリコキャラメルは発売当時から大変人気がありましたので、「片瀬博士」という名前は当時、多くの人に知られていました。

【参考文献】

- ・片瀬 淡一九四八『カルシウムの医学』高志書房
- ・原口 長之一九六九「来民が生んだ医学者 片瀬 淡」『石人』第十卷第八号 熊本史談会
- ・平川 厚一九六九「来民が生んだ医学者 片瀬 淡」『石人』第十卷第十号 熊本史談会
- ・宮崎 隆之一九六九「医学者 片瀬 淡氏のこと」『石人』第十卷第十一号 熊本史談会
- ・平川 厚編一九七六『鹿本町史』鹿本町役場

⑰熊本県議会初の女性議員。婦人連盟理事長。

(一九〇四～一九九五)

やすだ つばみ
保田 蕾



保田 (旧姓・大坂)

蕾は山鹿市鹿本町来民の豊職人・大坂甚吾、ツユの長女として生まれました。教育家の野口サキ、大坂巳年子はいずれも蕾の実妹にあたります。熊本県女子師範

学校(現在の熊本大学教育学部の前身)を卒業し、鹿本郡稲田尋常小学校(現在の山鹿市立稲田小学校)の訓導(教員)となりました。小学校に六年間務めた後、さらに勉強を続けたいと考えた蕾は小学校を退職して上京し、共立女子専門学校(現在の共立女子大学)に入学、卒業後は大学助手を務めました。その後、昭和七年(一九三二)熊本県立松橋高等女学校(現在の松橋高等学校)の教諭となるため熊本県に帰ってきました。

昭和九年(一九三四)八代郡鏡町(現在の八代市鏡町)の医師で、後に鏡町長を務めた保田元雄と結婚しました。蕾は鏡町の婦人会長を務め、夫の元雄は町長としてその職務に励んでいました。戦時中、政府に協力していたとして昭和二十一年(一九四六)、夫が突然、公職追放(※)となり、町長の職を失いました。

そこで蕾は昭和二十二年(一九四七)鏡町の町議会議員選挙に立候補して当選。女性初の町議会議員として八代郡内でも評

判となりました。

昭和二十五年(一九五〇)、熊本県婦人連盟(現在の地域婦人会連絡協議会)理事長となった蕾は、家庭内や社会での女性の地位向上のために全精力を傾けたいと考えようになり、翌年の昭和二十六年(一九五二)には熊本県議会議員選挙に出馬して最高得票で当選、県議会議員として活躍しました。県議会議員となった蕾は女性の立場で意見を述べ、教員の産前産後休暇の取得推進を訴えたり、戦争等で夫を亡くした女性(未亡人)への援助を呼び掛けるなどしました。当時は女性の福祉に関する事が県議会でも取り上げられることは少なかったため、こうした蕾の発言は非常に注目されました。

議員としての活動の一方、老人ホームを訪問して入所者の方たちと歌や踊りを通じて交流したり、汽車で乗り合わせた見えず知らずの人とも仲良くなるなど庶民的なエピソードが残されています。

昭和三十年(一九五五)公職追放が解けて夫の元雄が町長に復帰すると、蕾は議員を退いて再び熊本県婦人連盟の理事長として社会福祉の分野で活躍しました。昭和三十三年(一九五八)にはそうした活動に対して県知事から功労者として表彰されています。

※公職追放：戦後の民主化政策の一つとして、昭和二十一年(一九四六)、日本を占領していた連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の覚書にもとづき、議員・公務員、その他の政界・財界・言論界の指導的地位から軍国主義者・国家主義者などとされた人々を追放しました。

【参考文献】

・平川 厚編一九七六『鹿本町史』鹿本町役場

⑱ 日本家政学会九州支部創設

(一九〇六～一九八五)

野口^{のぐち} サキ



野口(旧姓・大坂) サキは山鹿市鹿本町来民の畳職人・大坂甚吾、ツユの三女として生まれ、幼少の頃からとても勉強熱心でした。

昭和二年(一九二七)東京女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)家事科を卒業。熊本県女子師範学校(現在の熊本大学教育学部の前身)教諭、熊本県立女子専門学校教授を経て、熊本女子大学(現在の熊本県立大学)教授、その後、熊本学園熊本商科大学及び熊本短期大学(現在の熊本学園大学)教授を務めました。

昭和二十七年(一九五二)日本家政学会総会において「家政学の学術体系」を発表。日本家政学会家政学原論研究会委員と

して活躍しました。サキは家政学(家庭生活を中心に人間の生活と環境の作用について研究する学問)の専門家として、江戸時代の古文書から読み取れる家族構造や職業の研究、また熊本県内の女性を調査対象として家庭生活の実像を明らかにしようとした研究などを行いました。

昭和二十九年(一九五四)、日本家政学会(日本の家政学の研究者を代表する団体)に九州支部が創設されると、その幹事長、支部長として九州支部の育成に尽くしました。それによって、日本家政学会九州支部の名誉会員に推されるほか、老年社会学会の理事を務めました。

女性初の熊本県議会議員となった保田菫は姉、教育家の大坂巳年子は妹にあたります。大坂家は非常に教育熱心な家庭で、サキら姉妹は「大坂三姉妹」と呼ばれてその才能を評価されていました。

【参考文献】

・平川 厚編一九七六『鹿本町史』鹿本町役場

①9 熊本女子大学教授。家政学を研究。
(一九一七〜一九九九)

おおさか
大坂 巳年子



鹿本町来民の豊職人・大坂甚吾、ツコの四女として生まれた巳年子は昭和三十三年（一九五八）、法政大学大学院社会科学研究所、経済学専攻修士課程を修了。昭和三十五年（一九六〇）第二回日本青年海外派遣北米班副団長としてアメリカ合衆国に渡り、国際親善に寄与しました。その後、茨城県立下館女子高等学校（現在の下館第二高等学校）の教諭から労働省（現在の厚生労働省）に入省し、熊本県をはじめ大分、山梨、和歌山の各県で婦人少年室長などを務めました。さらに労働省を退職した後、福岡女学院短期大学の助教授、熊本女子大学（現在の熊本県立大学）の教授を務めました。

熊本女子大学時代には先に教員を務めていた姉の野口サキとともに家族構造や女性の家事労働について家政学の研究に力を入れました。また活動は家政学の分野のみならず、日本老年社会科学会（老化と老人問題、社会サービスに関わることを研究する研究者の団体）の評議員として社会科学の分野でも活躍しました。

【参考文献】

・平川 厚編一九七六『鹿本町史』鹿本町役場

②0 日本およびアメリカ合衆国でキリスト教を伝道
(一八五六〜一九一四)

おおくぼ
大久保 真次郎



大久保真次郎は鹿本郡岩原村郷原（現在の山鹿市鹿央町）の農家・大久保萬治、たがの長男として誕生しました。真次郎は幼い頃から学問に関心が高く、中富村（現在の山鹿市鹿本町）の杉谷塾で漢籍（中国の書籍）などを学んでいましたが、明治四年（一八七二）県下全域から優秀な学生を集めて医学所兼病院（通称・古城医学学校）が開設されると真次郎は生徒として招かれました。

しかし、明治八年（一八七五）医学学校が閉鎖されたため、破傷風菌の研究で有名となった北里柴三郎（一八五三〜一九三二）らとともに東京医学専門学校（現在の東京大学医学部の前身）に入学して医学の勉強を続けました。東京での真次郎の学費や生活は熊本県出身の官僚・矢島直方（一八二三〜一八八五）が面倒を見てくれました。

ところが直方が突然、官僚を退職してしまったため、真次郎はこれ以上、矢島家に迷惑をかけるはいけないと考えて東京医学専門学校を退学し京都の同志社英学校（現在の同志社大学）へ転校しました。

しかし同志社では真次郎や徳富蘇峰（一八六三〜一九五七）ら熊本出身の学生たちと、それ以外の学生たちとの仲が悪くなり、間もなく真次郎らは同志社を退学しました。その後、真次郎は仏教の禅宗を学んだり、海運業を始めたりと転々として過ごしました。そうした中、明治十五年（一八八二）熊本の地方

政党「公議政党」(後の九州改進黨)の委員候補に推されました。またその年、徳富蘇峰の後押しで蘇峰の姉・音羽と結婚し岩原村の実家に帰りました。

しかし実家での生活に馴染めず翌年、急に実家を出て広島県の尾道に行き再び海運業を手がけました。このような不安定な生活の中、明治十八年(一八八五)には妻の音羽、娘の落実(一八八二〜一九七二、後の女性解放運動家・久布白落実)はキリスト教の洗礼を受けました。音羽がキリスト教を信じたのはキリスト教徒だった弟の蘇峰らの影響によるものと言われています。洗礼を受けた後、音羽と落実は真次郎が暮らす尾道へと向かいました。

尾道での事業が上手く行かず悩み苦しむ日々を過ごしていた真次郎は、キリスト教の洗礼を受けた妻と娘を見て明治十九年(一八八六)の正月、突然、キリスト教へと改宗(宗教を改めること)しました。真次郎はかつて在籍した同志社の創立者・新島襄(一八四三〜一八九〇)へこのことを知らせ、新島から聖書・讃美歌などキリスト教の伝道(布教)に必要なものや資金を受け取ると、尾道に伝道所を開いてキリスト教の布教活動を始めました。

翌明治二十年(一八八七)真次郎は再び同志社に入学し、牧師となるため本格的に神学を学びます。卒業すると埼玉県、次いで群馬県でキリスト教の伝道を行った後、明治三十四年(一九〇一)にはハワイに渡りホノルル日本人教会で伝道を行いました。

当時のハワイは一八九五年にアメリカ合衆国に併合されたばかりで(それ以前はハワイ王国として独立していた)、現地のキリスト教の教会は訪れるハワイ人の人々に英語教育を行ったり、食料を与えたり、あるいは就職の世話をするなどしていました。真次郎はそうした「施し」を行う教会のことを「乞食製造所」と呼んで批判しました。そして、「自給独立の改革」(自分

たちの力で生きて行くことを目指す動き)を提起して既存(以前からある)の教派には属さないという「独立教会宣言」を行いました。真次郎の努力の結果、ホノルル日本人教会はアメリカ人の牧師に頼らず日本人だけで運営できるようになりました。明治三十七年(一九〇四)、真次郎はアメリカ合衆国本土のカリフォルニア州オークランドへ赴くこととなりました。そこでも真次郎はハワイと同様に日本人の独立教会設立に奮闘し、成功しています。しかし、教会が設立された後は教会には残らず「伝道団」を作ってさらにアメリカ各地に住んでいる日本人に対して伝道活動を続けました。

当時、カリフォルニア州周辺には、仕事を求めてやってきた日本人が大勢暮らしていました。しかし、農業分野で大成功を収めてお金持ちになる日本人がいた一方で、アメリカでの生活に馴染めず、お酒や賭け事などの誘惑に負けて問題を起こす人も多くいました。そのためアメリカ人の中には日本人移民を快く思わない人たちも多く、日本人の排斥運動(外国人を追い出す運動)が起こっていました。

こうした状況を知った真次郎は日本人たちをまとめるためには宗教の力が必要だと考えたのです。真次郎は日本人移民たちに「自分を大切にしない。日本人としての自覚を持ちなさい。自分をしっかりマネージ(管理)できるようにになりなさい。自覚をもって生きるようになりなさい」と言い続けながらキリスト教を広めていきました。大正三年(一九一四)、サンフランシスコで亡くなった真次郎は日本人独立教会を造ったオークランドの墓地に葬られています。

【参考文献】

・鹿央町史編纂室編一九八九『鹿央町史』上巻
鹿央町

編集委員

芹川 博己 (山鹿市教育委員会社会教育課)
佐治 健一 (山鹿市教育委員会社会教育課)